



I はじめに

分科会基調については初めに協力者から次のように呼びかけた。

「地域の顔の見えるつながりが薄れ、個人の自己責任が求められる社会へと向かっている。そこでは被差別の子どもや若者が不安をつぶやく声はないものとされてしまっている。また学校が行きたくない、しんどいところとなっている。

差別のある社会で、自らが学び、出会った自分が、どう解放され、どんな居場所をつくり、どう生きていくのか、その実践を丁寧に紡いでいこう。」

この後、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑤

ひいじいちゃんは猟師だった(愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

熊本 地域の鹿肉処理施設「森の息吹」の成り立ち、関わりを教えてください。また学校の中でのあおぞら子ども会の位置と子ども会活動の発信の場について教えてください。

福岡 鹿肉処理施設と子ども会とが関わるきっかけについて教えてください。

報告者 町内で駆除した後の処理について、鹿肉として加工しようと町が補助金を出してNPO法人で運営している。

学校で子ども会のメンバーとそれ以外で立ち位置が異なるといった区別はない。人権にかかわる授業では積極的に意見を言うリーダー的な存在である。町や県のつどいや集会で、あおぞら子ども会の活動を発表している。

子ども会では地域の「人、もの、こと」を人権の視点でみることを大切に進めてきた。部落差別問題に取り組む際に、屠畜の勉強を写真を使ってきたが、地域にある類似の施設を使って学ぶことを考えてつながった。

兵庫 あおぞら子ども会の子どもたちは被差別部落の子どもたちばかりなのか、立場の自覚はあるのか、またどのように立場の自覚を促していくのか。

山口 「あきさん」が曾祖父は猟師であるということと言えなかったのは、そこに社会的差別が存在

するからなのか、またそれは部落差別と関わるものなのか、さらにはこの学習をすることがどのように部落差別の解消に関わるのか。

奈良 学校給食の献立にする取り組みをうけての学校現場の思いはどうか、自分も給食に被差別部落の文化としてにこごり(ホルモン)を出そうとしたが、並大抵ではなかった。

また、「あきさん」が曾祖父のことを話し出すまでに周囲の子がどう考え、共感したのか、その子のことを発端にわがこととして考えられるつながりがあるならそれについて。

報告者 子ども会に来ている子たちはみんなが反差別の立場、差別をなくそうと自ら学ぼうとする子が来ている。部落、部落外ではなく、小学校4年生以上の全児童生徒への呼びかけ、差別をなくす仲間として一緒にやりたいという子が来ている。したがって部落出身でない子もいるし部落の子もいる。

猟師への差別があるわけではない。しかし駆除した動物の死骸や血を見て住民に嫌がられることはある。それも子どもたちに見せながら、大切な仕事として学習している。この学習のねらいは地域資源に目を向け、そこに携わる人の願いや誇り、培われてきた技術を感じ取れること、それらが私たちの生活に深く関わっているということに気づかせることである。そこには部落差別の解消につながるものがあると思っている。

学校給食には鹿肉の加工品を取り入れることで活用している。

周囲の子については子ども会に入ることでも人権について考える視点が変わってきていると感じる。**大阪** 皮なめしは嫌という声が出たときに、その感情について何度も話し合う関係が素敵である。「あきさん」は学校では友だちとの関係に悩んでいるが、受け止めてくれる経験をもとに反差別の取り組みを進めていけた。あおぞら子ども会が大切な居場所であることを感じる。

大阪 地域外の人が半数を超える自分の地域で、食肉産業について、学習に取り組みたいと考えている。地域のつながりの中で、捌くところを見にこないかと声をかけてもらった。体験することでプラスのイメージが持てる。

熊本 報告の中で差別があるのかモヤモヤする。「あきさん」が自分と重なる。自分の地元には食肉産業があり、ひやかされたり馬鹿にされたりした経験もある。当時は地元の教材ではなく大阪や奈良の教材で実践していたが、ちょっと違うと感じてきた。地域のおっちゃんおばちゃんたちは命を作る仕事をしているんだという地域教材を作った。地元の解放子ども会では聴き取りからの発表をした。そこには「豚殺し」とはやし立てられて悔しい思いをした言葉が語られるが、子どもたちは恥ずかしいのか思いを込めて言えない。「あきさん」が自分の曾祖父のことを言えなくさせているものはなんなのか、しっかりと捉えなければならぬのではないか。

報告者「あきさん」のモヤモヤを一緒に考えてきたものとして、今後も一緒に悩み続けようと思っている。言えないことが一番伝えたいことと思っている。その一步を「あきさん」は踏み出した。それをこれからも子どもたちの仲間を作り、保護者同士もつながりあって、地域の協力もしていただいて、一生支え続けていきたい。

—報告2—⑦

よそ者でもお客様でもなく共存者(兵庫県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 自分のクラスにも外国にルーツを持つ子がいる。報告者が淡路島に U ターンしたとき、「ハーフ」(報告者のこだわりとして)の子どもたちの悩みが今もなにも変わっていないとあったが、報告者自身の子どもたちの悩みの実態とは。

報告者 今、支援しているペルーにルーツがある女の子、小学校にあがると「○○ちゃんのお母さん、ペルー人なんやろ?」と言われるようになり、家の中でスペイン語を話したくないというようになった。また、今日も△△君に「ペルー人なんやろ」と言われ泣いて帰ってきていた。自分自身も「お母さん、韓国人なんやろ」と言われ、そこからなんか違うと感じ始めるようになった。20 数年前と実態は変わっていないと感じた。

兵庫 以前在日 3 世の子どもを担当した。家庭訪問に行ったときに家の中に韓国の文化を見た。報告者の母親は韓国の文化や歴史をどのように受け止めていたのか。

熊本 お風呂の中での「日本人の家庭に生まれたらよかったね」といった母親との今の関係について、また今、自分の故郷は好きか。

報告者 「韓国ではこうだよ」と伝えられたことはあるが、私の中に韓国にルーツがあるということ強制されたり、そこに引っ張り込もうとされたりしたことはない。小さいときは当たり前韓国に親戚に会いに行っていた。父が10年前に他界した際に、母は「私はお父さんと同じ墓に入る」と言った。2年前に自分のルーツを子どもに見せたいと思って韓国へ行った。母の中には、今は家族も孫もいるし、自分は日本人であり、日本で暮らし日本で死ぬという覚悟を感じた。家の中に韓国のものがあるが、見せびらかすことはない。

淡路島を離れたときはどうしてもここにいるのが嫌で、嘘をついて出た。離れて暮らすことで、「じつはあのときこういう気持ちがあって淡路島を離れたんや」ということを伝えたことはある。だから母もそういう気持ちで子どもが育ってきたということは認識している。深掘りすると自分自身の苦労話やしんどかったことが思い出されて、ネガティブになってしまうのでしていない。故郷としての淡路島について、自分はいつでも出られると思ってきた。夫は淡路島が大好き。自分も今は淡路島のこと好き。

福岡 部落に生まれたことによって部落問題から

逃げたくて海外へ行った。子どもには自分のことは「ハーフ」と言わないように言ってる。いろんな国籍や背景がある子どもがたくさんいる中で、子どもにはあえて「ミックス」という言葉を使ってほしいと話している。どうしても「ハーフ」という言葉には半分半分という意味が入る。海外ではほとんど使われておらず、「ミックス」という言葉を使うことは大切だと考える。

国際女子会について。人権同和教育の視点から言うと、問題を解決していくためには実態をしっかりと把握して課題を出していくということがある。それをするためには女性同士が恋愛トーク等だけに収まらず、本当にしんどいところを話せるようなグループ、そこを出し合ったうえで、いかに女性同士がエンパワメントしていったら、人権を大切にしていって地域作りをしていくかが大切である。

ゼノフォビア・排外主義が広まってきている日本において、異文化、他文化を知りたくないという人はたくさんいる。だから「知ってください」というより、なにが一番大切かということ憲法や国際法を徹底して学んでいくということだ。人権がすごく大切だということ、部落解放同盟でやってきたことは憲法に保障されてきた権利を行使する運動だから、私は絶対に他の人の権利も尊重する、そんな生き方をしてほしいと伝えている。主権者教育を人権同和教育の視点からしていくということをこれからも続けていきたい。

福岡 担任していたクラスに全く知らなかったが父親が韓国籍の子がいて、自分のことをクラスのみんなに話したいと言いつつ出たことがあった。家庭訪問し母親に相談すると、本人がそう言っているなら同意してくれた。本人がクラスで話すと、周りの子は受け入れてくれた。やはり周りの雰囲気作りを担当がしていくことが大切だと感じた。

—報告3—⑥

山口自主夜間中学宇部校の活動と、それを通じて私が思うこと(山口県人教)

—主な質疑と意見—

高知 夜間中学生に学ぶ会をしている。みなさんはどれくらい夜間中学校のことを知っているか。2016年の教育機会均等法ができて各県に1校、政令指定都市に1校設置することが定められている。

夜間中学校に来ている人たちの中で、学校に行きづらい子ども、小中学校で勉強が苦手だった人は、なぜ学校と折り合いがつかなかったと考えられるか。また山口県の公立夜間中学の推進状況を聞かせてもらいたい。

報告者 学校には行きにくい自主夜間中学になら来られる、ここでなら勉強できるという思いをくみ取って、前を向いていこうとしか言えないと思っている。学校に行きにくい人の中には、人に対する恐怖心があるように感じる。自分のアイデンティティが確立しないうちに友だちや家族から嫌な思いをさせられて傷ついてしまうと、人に対する恐怖心

を持ってしまう。心理的な成長の中で自己肯定感が養えないと学校に行きたいけど行きにくいという感じになるのではないかと。自主夜間中学校なら人数も少なく、いろんな人がいて、行っていいかなと思ってきてくれていると思うので、その人たちが前を向くお手伝いができたらと思っている。

山口県では今も公立の夜間中学校はないし、設置の検討もない。いろいろな人や団体が行政に対して夜間中学を作してほしいと嘆願しても積極的ではない。市民からそういう声も上がっていないと言われる。そうであれば、いろいろな団体が声をあげて、小規模ながらも民間でこういった団体ができ、少しずつ時間をかけて広がっていくと行政も作らなくてはと思うのではないかと、それが一番よい方法なのではないかと思っている。

奈良 奈良県では公立夜間中学は義務教育を受けられなかった人に制限されていてすべてが受け入れられているわけではない。自主夜間中学のほうが受け皿として広く受け入れてもらえるのかと思うが、お金は必要なので、公的な補助を受けられているのか、補助を受けるにあたって制限が発生していないのか聞きたい。

報告者 運営費はほとんどかかっていない。補助金をいただいてなにができるのか、なにをしなくてはいけないのか、自分の中でまだアイデアが固まっていない。今後は収入を得ることで、活動の質も内容も量も変わるので、いろんな人に伝えていきたいということの早道になるかもしれない。自分なりによく練って検討したいが、まだまだその段階に至っていない。

奈良 先ほど言われた、質の高い教育とはなんだろう、と思っている。補助金が出ていないからこそ自由にできて、幅広い受け皿になっていると感じる。補助金が入ると使用制限がかかり、活動が制限されるかもしれない。そのときに質の高い教育とはなにか、考えさせられる。

報告者 質の高い教育とは、勉強も大事だが、その前段階として、ここは安心できる場所であると感じ、自分自身で勇気を持って次のステップにつなげていく、それは社会に出るところかもしれないし、成人したら社会で働くというところにつながるかもしれないが、それが自主夜間中学校の求める教育像みたいなのところだと思っている。意欲を伸ばすところであって、塾ではない。

奈良 自分自身も学ぶ権利をどう保障していくかについては、日頃不登校の子どもたちを見ながらも考えている。この報告を聞いて、子どもたちがどこかに学べる場所がある、それをどう確保していくか、文科省としても考えてほしい。

奈良 報告の中で「学びは宝」とある。奈良では自主夜中も公立夜中もある。識字学級で学ばれている方のつづやきを地元の小学生や中学生が学びあう。学力を上げるだけでなく、生きていく術、糧である文字というものを、識字や夜間中学の生徒の方から知っていかないといけないのではない

か。「ネガティブからポジティブへの変化」というものを発表の中から自分自身感じた。家庭・地域・自分の故郷を、地域・国籍を超えた形で親の生き様を含めて見つめなおすことを識字で丁寧にやっているし、それを自分の自覚でやれたように思う。子どものつづやきをつないでいくのが教師の仕事であり、丁寧につなぐことで、教師の力を飛び越えた形でつながる子どもたちの姿がある。その中でネガティブからポジティブへの変化というものが、教育現場や識字の担当者は変わり目をどう考えていくのかが大事になる。

大阪 自分も小学校の教壇に立つものとして、クラスに不登校の児童がいる。家庭訪問をしても本人と出会えたのは一度きり。学校に来られない理由を本人に押しつけるのは違う。来られない理由に自分は、学校はどこまで迫っていたか、子どもが行きやすくしようとしてきたかが考えさせられた。夜間中学の学習者にも支援者にも、それぞれの思いがある。やっぱり人なんやなと感じた。学校でも人のつながりはそうあるべき。今、自分が相対している子どもたちに「学びたい」という感情を抱かせることができていたか、小学校なので、毎日当たり前のように登校してくる子どもたち、当たり前のように授業を受けている子どもたちの学習に対する「学びたい」という思いに今一度迫っていききたい。

1日目総括討論

福岡 3つの報告がどのように部落差別をなくすことにつながっているのかを明確にしてほしかった。学校には行けないけれど夜間中学には行ける人たちが、なぜ学ぶ権利をあきらめずがんばろうとしているのか、権利の主体者としてがんばっているところの話ももう少し聞きたかった。

また、子どもの権利条約をもっと活用できるような学校現場というのを大切にしてほしい。教育という言葉には本来の力を引き出すという意味がある。その人にどんな可能性があるのか、どんな可能性を秘めているかを探っていくところ、そこから闘うための知というものをどのように使い、自分の権利のために立ち上がっていくのか、立ち上がることによって他の人たちの人権問題にも気付くようになり、最終的に反差別の集団作りにつながっていくと思う。

高知 先ほど不登校の子どもたちの受け皿という言葉があった。受け皿を作ってはいけない。学校はそこへもって行ってしまふ。これは学校教育の問題。「今日も机にあの子がいない」、同和教育の原点である。学校に来てない子どもたちのことを心配して、何をしてるんだろうと家庭訪問したらそこには部落差別があったということ。受け皿を作ること、は机ごと他のところへ持っていったら気になる机がない。作る必要性はわかるが、地域の子の中の人間関係とかはもっと大事ではないか。文字を学び、初めてわかったという言葉聞いて他人事じ

やないと思った。自分が関わってきた子の中にこんな子がいるのかもしれない。この思いが「字を覚えて夕焼けが美しい」の識字に重なっていく。夜間中学とはそういう学びがあるところ。ここにいるみなさんに、夜間中学のことに、関心を持ってもらいたい。「学びは宝」、夜間中学は宝物。人権教育、同和教育をやっている人たちが学ぶ最高の場と思っている。夜間中学を全国に作っていく、どんな学校を作るかというときに、ここに集まっている先生方で作ってほしい。

学校へ行きたくないのはその子どものせいなのか、考えないといけないのは教員。子どもたちを励ます言葉で子どもたちが傷ついている。教師の善意の中で子どもたちが傷ついている、学校に行きづらくなっているということを書いてもらいたい。そういう子どもたちは確実にいる。

また、学びについて、学習者が夜間中学校の中で一番難しかったのは人間関係と言った。夜間中学は老若男女がいて外国人がいる、その中で人間関係を学ぶ。学ぶということは人と人がつながり、助けてと言えること、それを夜間中学の中で学んでいける。

熊本 愛媛の報告を聞き、八代の取り組みを紹介したい。八代では3年生に集会所に来てもらって、二ツトリを捌いて見せている。食べることは生きること、命をいただくこと。食べてもらって子どもたちに感想を書いてもらう。その形で10年間続けている。また、屠畜場があったので、牛の解体を見せに連れて行っていた。最近では教員の現地研修としてビデオで見てもらって、こういう仕事があるから肉が食べられることを理解してほしい、実際の場面を見てほしいと思ってやってきた。最初はそんなことをしてどうなるかと言われたが、今の時代の子どもたち、先生たちにも見て考えてほしいと思っている。

1日目まとめ

3本の報告は、一人ひとり違うというあたりまえに気づき、自分自身を、またその生き方を、まずは自分が受け入れ、周りから認められ尊重されていく過程を、さまざまな視点から報告されたと感じる。感情を言葉にできたり、感情について語れたりするのは、安心して話せる環境と、なにより聞いてくれる相手の存在がある。知らないからよくわからないと突き放さず、知らないから知りたい、教えてほしいと思える環境づくりがそこにある。さみしくても個人の自由を尊重してくれる社会が望ましい、目的や利点がなければわざわざ人と付き合う必要はないと考える人が、ともに50%を超える世の中で、つながることが大事だと考え、つながりをつくりたいと思っている私たちにできることはなんなのか、引き続き明日も考えたい。

—報告4—⑨

屯鶴峯地下壕が語りかけてくること

(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

京都 なぜ今まで地下壕が知られていなかったのか。また子どもたちへのフィールドワークや教材化は進められているのか。

熊本 地元の子どもたちへの研修はされているのか。また地域住民への伝え方、啓発はどのようにしているのか。「人権確立をめざすまちづくり」の分科会として知りたい。

報告者 知ってほしいのみ。報道もされない。8月上旬のみ。在日朝鮮人の問題を話してもカットされる。フィールドワークは子どもたち対象もやっていたが、安全が保障できないということで今は自己責任として大人のみ。地域向けの研修をやっていた時もあったが、難しくなってきた。ヘイト集団がやってくる。広く募集をかけることが難しい。教材化については学校でやってほしいと考えている。

大阪 近くに住んでいるが知らずに平和学習をしていた。本土決戦が奈良や大阪で起きていたらと思うとヒヤッとする。身近なことで考える機会である。現地に行く必要がある。教員たちや子どもたちにどんなことを感じてほしいか。また反差別の視点として朝鮮人労働者のことでどんな意識をつないでいきたいか。

報告者 現場でしか感じられないものがある。反差別の視点で朝鮮人問題を、私たちの視点で平和について考えてほしい。現場に来ることで本土決戦は本当にやる気でいたのだということを感じる。教員がその視点を持ってもらうことで子どもたちへ伝えることもきっと変わっていく。

奈良 小学生が校外学習で屯鶴峯へは行く。でも地下壕の存在は知らない。これだけしっかり残っていて、戦争を感じられるものは稀である。広島、長崎、沖縄へ行くが、地元の、家の近くにある戦争遺跡に行くことも大事。全国に戦争の傷跡はある。柳本の飛行場もその一つ。朝鮮人労働者の宿舎があった。そこに生きた人がいる。

愛媛 どこが差別なのか。朝鮮人が働かされていたことか。そこには日本人もいた。どこが違うのか。平和という意味では大変な時代だったが、差別という視点ではどうなのか。

報告者 朝鮮人労働者が、という事実はよくわかってない。労働環境の過酷さ、仕事の分業はあった。具体の中に差別はあっただろう。だが、取り立てて差別を強調しようとは思わない。差別の問題に取り組む中で、そのひとつの問題として屯鶴峯地下壕があればいい。屯鶴峯地下壕のことだけでも朝鮮人問題がすべてわかるわけでもない。反戦も差別も思っている。

福岡 石炭の炭鉱がある。朝鮮人の強制労働が行われていた。形に残すことが大切だが、保存にはお金がかかる。田川にも戦争遺跡がある。航空機を隠す穴があった。地域も知らない。身近にあること

が自分事となり力となる。解放子ども会の学習資料で伝えてはいる。

兵庫 朝鮮と日本の関わりを長期的にみる必要がある。各地で友好の歴史を築いてきた。トンネル工事で亡くなった方の碑、朝鮮人の名前も刻まれている。過酷な条件の中で助けあった。友好の歴史を伝えていく必要がある。

奈良 人権教育こそ学校でしっかりやっていくべき。人権教育は知識・理解がすごく大事。戦争についても同様。戦争は自分のルーツの方が必ず経験しているのに語られていない。負の歴史は隠したい、見えにくくなっている。でも差別だけがいまだに残っている。よくわからない中で差別をしているのではないか。戦争についても、よく見たら学校でも教えられるのに、負の遺産として見ないようにしているのではないか。人権について敏感になりながら子どもと向き合う必要がある。

熊本 人権を基軸にして様々な取り組みをしている。熊本県の、八代の戦争遺跡を残していく。

—報告5—⑧

教室はふたつめの家族～日之出よみかき教室
(木曜日)の活動から～ (大阪市人教)

—主な質疑と意見—

兵庫 水平社宣言の識字版として指導されていることについて、取り組みや思いについてわかることがあれば教えてほしい。

支援者 自分はその取り組みをしたときはいかなかったもので、よくわからない。字を学ぶことで自分の生きざまがどう変化していったか、短い文章でなにかを表すことが大切なんだというようにまとまったと思われる。

大阪 水平社宣言の取り組みは自分の悔しかったことをばねにして、学んで意識が変わったことを書いていたように思う。学習者自身が発表することの大切さが伝わる。おしゃべりを大切に、子どものころどうだったか等、話しながら生い立ちを書く。毎年書いたものを通して発表し、たくさんの感想をもらって自信になった。そういうきっかけを日之出の人たちからもらった。

学校や地域で友だちはできたか。生活の場で困ったことはないか、まわりとのつながりはできたか。

報告者A 友だちができて地域の習い事にも行っている。いろんな友だちができて仲良くしている。週末は公園で一緒に遊んでいる。特に仲の良い友だちもできた。日本に来て、言葉がわからなかったときに教えてくれた。週末、公園に誘ってくれる。

支援者 毎週木曜日の学習の最後に「フクさん」が日記を書いて報告してくれる。そこでいつも出てくる名前がある。それを親になった気分で嬉しく思っている。

報告者B 困ったことは特に日本語。来日する前に日本語を勉強してきたが、来日してから日本人と話すスピードが速くて聞き取れなかった。仕事で毎日日本語で話したり、休憩のときに日本語で話

したり聞いたりすると日本語のスキルもよくなった。「フクさん」が2年前に来日したとき日本語も全然わからなかった。学校に行くとき、いじめる友だちがいる。「フクさん」に毎日日本語を教えて、今は理解できるようになった。学校の先生のおかげで学校が大好きになった。特に給食が好き。

報告者C 病気になって病院に行くときに困る。診察するとき、先生は専門用語で説明する。ベトナムで診察するときは紙に病気のことは詳しく書いてもらった。日本では意味が分からなくて、診察して家に帰って、自分の病気の状態について本当に心配した。そのときは支援者に頼んで一緒に病院に結果を取りに行った。ベトナム語とか外国語等で書いてくれることが外国人に対して大切なこと。

熊本 支援者の方に、それまで別のところで日本語指導をしていたのに、日之出に入ることになったきっかけと、解放運動の中で生まれた識字学級、その成り立ちの部分で今関わっている日之出の識字学級と他のところとの違いを教えてください。

支援者 大阪で解放運動をしてきた。自分は読んで書ける。自分が携わったときに文字を書けて当たり前という意識がどこかにあって、摩擦が起きた。それがトラウマで識字を避けてきた。それは自分の不勉強と力のなさ。その後全国女性集会の識字の分科会に入ってみた。そのときに部落のおばちゃんたちの当時と変わらない思いに触れ、識字から逃げていた自分がダメだと思った。もう一度いちから関わられたらと思い、まずは人に文字を教えるという意味で日本語教師の資格を取った。ただ「あいうえお」から文字を教えるということが物足りなかった。やっぱりかつて自分が避けていた部落のおばちゃんたちとの関わり、識字の中で自分にできる関わりがあるのではないかと考えて、日之出につながった。原点に近いところで一緒に学ばせてもらっている。わからないことを一緒に調べて少しずつ解決していく作業を一緒にしてる中で、自分の軽さをすごく感じて、解放運動をがんばっていたつもりだったが、人とのつながりとか関係性とかをしっかりと築くことができていたのかと改めて感じる事ができた。自分の宝としてこれからも続けていきたい。

福岡 今は識字教室がない。外国籍の子は日本語が不自由で、たとえば、遠足の日にランドセルで来たこともあった。「フクさん」が、学校で一番うれしかったことは。

報告者A 学校で楽しいことは友だちができて、給食が食べられること。

III 総括討論

熊本 継承という点で、地下壕について人権啓発のひとつとして行政に保存を求めることはしてこなかったのか。

あるのにないことにされたり、あったのになかったことにされたり、報道の中で在日問題をあげるとカットされる、避けられるように、そういった風

潮にあらがう取り組みがあれば。必要としているから残そうとしていることに対して、いろんな勢力があって、でもそれでもやり続けているよという取り組みをこの場で聞きたい。

報告者(奈良) ずっと求め続けているが、ほとんど進んでこなかった。最近地域一帯の整備計画が出てきて、地下壕の活用という言葉が出てきた。あるのになににされることはいっぱいある。説明板をどうしていくのかは必ず揉めていくと覚悟をしている。時間をかけてやっていくしかない。

山口 長生炭鉱の水没事故、市民団体が取り組んでいる。朝鮮人の強制連行の歴史があった。たくさん朝鮮人が働かされていたが、その事実だけで差別。慰霊碑に朝鮮の人の名前がない。当時朝鮮の人たちは日本人だったから名前を書く必要はないという見解。毎年2月の追悼式では朝鮮人の人たちも含めてすべての人の名前が読み上げられる。全員の名前がある、そこをきちっと伝えていくことが大切。追悼式に韓国的高校生や日本の中高生が参加し、そこで交流が生まれる。ピーヤ(排気抗)の潜水調査が行われ、説明板が日本語と朝鮮語でできた。教材化は小学生にもわかるようになっている。長生炭鉱の危険な場所で朝鮮人が働かされていたという「事実」から学んでいくことが大切。

奈良 平和学習で広島語り部さんに会って語ってもらう。事前学習より伝わるものがある。やっぱり行って体験することが大切。一人ひとりの感性を高めていく取り組みをやっていく。心を動かすこと。娘に障害がある。できるだけ外に連れ出す。行ってみて、会って、触れることを大切にしている。

奈良 ベトナムから外国人を受け入れた。その就労状況は日本人と差がある扱い。でもそれを言うことで彼女たちの立場が悪くなるのではないかと思うと言えない。就労期間を延長できるが、しないと。日本人ファーストという言葉の中で、外国人労働者に向けられる視線がどのようになっていくのかが心配。

報告者(愛媛) 差別がどこにあるのか、中2の子が部落差別が本当にあるんだっただけ聞きたいと保護者と一緒に結婚差別の話の聞き取りをした。親子2人とも自分に自信がついたという。自分の祖先に誇りを持つこと、語ることが大切と感じた。あおぞら子ども会の成り立ちは1995年、当時の中3生が、学校の授業の中で部落問題を扱った授業で、まわりの友だちが真剣ではなかったことを先生に相談した。そこであおぞら子ども会で学んでいくことになった。子ども会を巣立った若者が顔を出してくれることもある。子ども会活動の素地には部落問題がある。コロナのときのエッセンシャルワーカーへの差別は、部落問題を学んできたからこそ無理解、無関心、思い込みが差別につながる構造だと理解できた。子どもたち自身が気づき、大人へ働きかけていった。「あきさん」が曾祖父のことを言いにくかったのは、正しく情報を伝えなければならぬ、小学生にわかるように伝えられるのが

不安だったから。血や死体への子どもたちの反応が「怖い」というものだったため、言えなかった。子ども会で、「怖い」、「暗い」と感じるということについて何度も話し合った。差別する人、される人という分け方ではなく、自分自身の差別心といかに向き合っていくかが大切と考えている。

大阪 自分は部落出身。小5のときに母に打ち明けられた。自分が異質と感じた。祖父は食肉産業に従事していて過酷な生活をしてきた。そして早くに亡くなった。父を見ていると差別の現実がここにあると感じる。24歳で病気をし、右半身に制限がある。夢である学校の先生になることも絶たれた。部落差別と障がい者差別の真ん中にいて本当に幸せだったのか。自分の職場では系統だった学びがされていない。「寝た子を起こすな」もある。落ち込むし、怒りがあるが、見えないものにされていると感じる。顔の見えるつながりがなくなっている。言いたいことを打ち明けたい。隠して生きていきたいわけがない。マイノリティ性を誇りに思いたい。でも、できていない自分。全人教に来ると反差別の仲間がたくさんいる。教師として汗をかいていかないといけないと思う。バトンをもらっているので、教員の立場で応えていく。

大阪 長島愛生園に行く機会があった。そこで自分の差別性に気づく瞬間があった。当事者ががんばるのではなく、まわりが自分のことを話ができるような環境を作っていくことが必要。

京都 高校に勤務している。制度や意識が子どもを排除する仕組みになっているのではないか。学校にALTがいるが、ALT側からコミュニケーションを取れと言われても、先生方が忙しそうなので話しかけることができないと言わせている。学校や教員の側に課題がある。在日コリアンコミュニティの中でルーツが違う中で居心地の悪さを感じた。共存と言うが、「ここにいていいよ」と言っているのは誰なのか。マジョリティ側の視点なのか。出会ってよかったというポジティブだけでなく、ここにいていいのかなと思わせているものがある。

兵庫 不安を解消できる居場所作り、戦跡から人権を考えていく。歴史を正しく認識していかなければならない。淡路島にも飛行場が作られた。本土決戦に備えている。自虐史観を乗り越えていかなくてはならない。いろんな立場で悩んできた人こそまわりの悩みが見える。悩んできた方にこそまちづくりを担ってほしい。

福岡 人種、移民、兵庫の報告者はどう受け入れていくのか、どんな社会を作っていくのか。でもそれは受け入れ側と受け入れられる側になるのではないか。授業を受ける側としての意見が聞きたい。

IV 報告者から

報告者(愛媛) 子どもたちから勇気をもっている。大人になり、人権教育をやってみたい、まちづくりに貢献したいという子。多くのおみなさんの協力でここまで来ている。長いスパンで。

報告者(兵庫) 正しい答えはないし、当事者一人ひとりが違う。本人に聞いてみないとわからない。自分ならまわりの反応が気になる。好んで授業を受けたいわけじゃない。どうしてほしいか、本人に確認してほしい。愚痴を言う人がいるが、話したくても自分には言わないで、「どうしてほしい？」と本人に言ってほしい。この話を聞いてほしいと思う高校生の顔が浮かぶ。「私には言える」という高校生に「卒業したらご飯いこな」と返している。みんな努力では変えようのないことに悩んで、他の人の人生がよく見えることがあるんやなと思う。自分自身になにができるかなと考えたら、淡路島で寺子屋を作りたいと思う。自主夜間中学の話聞いて、これならやれると感じた。

報告者(山口) ひとつは学びの意味を考えた。人間の本質は単純で、ポジティブなことは良く、ネガティブなことは嫌。学んでできなかったことができるようになったら成長を感じるし嬉しい。学習者さんが嬉しいと感じる学びを提供すること。ふたつめは人権。人権を意識した行動をしてなかった。目の前に学びたい人がいるからそれを支援してただけ、それが人権だったんだと感じた。みんなが嬉しいと感じられること、話を聞いてポテンシャルを上げていこうと思う。

報告者(奈良) 地元の地域には部落はなく朝鮮人集落がある。そこの子たちを集めて活動してきた。どうか近くの方は来てください。話しても全部は伝わっていないと思うので。

報告者(大阪) 来年もぜひ参加したい。そう思える2日間だった。識字に携わってほしい。全人教に初参加、久しぶりに熱くなった。視察、覗きに来てください。

V まとめ

二日間の5本のレポートのキーワードは学びや出会いだった。報告をもとに、差別に対する悔しさ、痛み、不安、憤り、生きづらさなど、差別の現実があるからこそ、自分をそこに置きながら、学びや出会いの中で、自分自身と向き合った私は何をするのか、次の4点を確かめあいたい。

1点目は、学びや出会いを通して自分と向き合うことは、自分を取り戻すことであり、今の自分を高めていくこと(変えていくこと)であり、人と人との関係やつながりをつくっていくことであるからこそ、その場所がどのような場所である必要があるのかということ。

学びや出会いが、自分を取り戻すことであり、自分を高めていくことであり、取組を通して自分自身(報告者自身)が変えられていくことであり、人と人との関係やつながりをつくっていくことなど、学びや出会いを通して「自分と向き合う」ということがどういうことなのか、具体的な姿として示してもらった。だからこそ、私たちは学びや出会いを通して、被差別の立場に置かれている自分や、自分の差別

性に気づいたという声も重ねられた。自分の中にある偏見や差別心、無関心や他人事に捉えている加差別の立場にいる自分と向き合おうとしているか、自分と向き合う姿から学びたい。

最初は、学習する機会を奪われてきた人たちのためにと初めた取組が、その場所に集う学習者の思いを知り、自分自身が変わられていく中で、今、学ぶことの意味を自分自身にも問うている。私の先輩が常に私自身に問うてくれたのは、自らの立ち位置ではなく、立つ位置を問うことだった。上から目線という言葉を使いながら、自分が育ってきた環境や社会の常識から物事を見ていては差別の現実は見えない、「私たちは子どもたちや地域住民とともに差別をなくそうとしているのか問い続けなくてはいけない」と教えてくれた。だからこそ、問われたことは、部落問題においては被差別の立場でも、他の人権問題では傍観したり、関心さえ持っていなかったりした自分も含め、加差別の立場に立ってきた自分のこと。その上で、人権教育や同和教育に取り組む人を少数派にしてはいけない、差別を許さない人を、いかに多数派として形成していくか。

2点目は、学びや出会いを通して自分と向き合うことは、「自分を受け入れて生きていくことであり、自分の思いや体験を語っていくことである」ということだ。そして、自分を受け入れたからこそ、自分を受け止めたからこそ、楽に生きられるようになり、自分の思いや体験を語ることで、つながりや居場所をつくることにつないでいる姿に学びたい。親や家族の生きざまを見つめ直し、自分自身を受け入れて生きていくことは、これまで人権・同和教育の中で大切にされてきたことである。

今、置かれている環境がすべてではない、被差別部落出身であること、自分自身や家族に障害があること、外国にルーツがあること、その環境に置かれていることはその人の責任ではないことを大前提に、そのことは変えようのないことだからこそ、誰とつながり、どんな関係をつくっていくのか、その人が置かれている「社会的立場」「マイノリティ性」「被差別性」は、その人の問題ではなく、まわりや社会の問題だからこそ、まわりにいる私たちは、どこに立って、ともいどのようにつながりをつくっていくのか、学校の中で、地域の中で、問われていることを確認したい。

だからこそ、3点目として確認したいことは、差別の現実がどこにあるのか、そこをしっかりと見つけた上で取組を作っていくこと、事実から学んでいくことだ。

言えなかったのはなぜなのか、言えなくさせているのは何なのか、差別の現実がそこにあるのか、それを私たちはどう捉えるのか。問題を解決するためには実態を把握し課題を出し合っていくところからしか始まらない。自分がしんどいことを話せる場所が必要であり、そこで出し合えるからこそ、自分自身がエンパワメントされていく、そんな地域

をどうつくっていくか提起をしてもらった。

本来、その人の責任ではないことを理由に、偏見や差別によって、自分の存在をも否定してしまう、そんな子どもたちや保護者の思いを受け止め、それを語れる学校や地域をつくっていく、それを語れる場所やつながりをつくっていくこと、同和教育が培ってきたことを確認し、持続可能な人権教育につなげていきたいということが語られた。「あるのになににされる」「あったのになかったことにされる」、相手に言いにくいことが一番言いたいこと、そのことを「今もあること」「そこにあること」として、差別をなくすことを真ん中に置きながら自分を語り、仲間とつながりながら取り組んでいくことも確認したい。

4点目は、学びや出会いを通して自分と向き合うことは、「これまでの歴史や取組を、受け継いでいくことであり、語り継いでいくことである」ということである。

学ぶこと、出会うことで、受け取った私たちは、何を受け継ぎ、語り継いでいくのか、受け継いだものを語り継いでいる姿に学びたい。日之出よみかき教室は「せめて自分の名前や住所ぐらい自分で書きたい。子どもが学校からもってくる便りや支部が配布する新聞やニュースを読みたい」と部落差別によって奪われてきた文字を取り戻し、生活を交流してきた識字学級を原点にしながら、「日本語を学ぶことで自分の言葉で伝えたい」と生活を交流することで、本来その人が持っている力を引き出せる場所(自分の力を確かめられる場所)として「よみかき教室」へと広がっていることを届けてもらった。そのことは、本来その人が持っている力を引き出せる場所(自分の力を確かめられる場所)としての山口の自主夜間中学校の取組にも重なる。自主夜間中学校に通う小中学生の姿から、本来、その場所が学校にあるべきであっても、そうないない現実があるからこそ、必要な場所として確認された。このことは、昨年度の熊本全同教の社会教育の分科会で、「夜間中学校は『なくてはならないもの』であるが、本来は『あってはならないもの』」と確認されたことにも重なる。

何を継承し、それを今の時代にあわせてどう発展させていくのか、同和对策審議会答申が60年前に示した「部落差別の解決は、国の責務であると同時に、国民的課題である」と示したことが、形を変えて「全国部落調査復刻版」裁判の中で、憲法第13条の幸福を追求する権利と、第14条のいかなる理由があっても差別されない権利を引用しながら、被差別の当事者にとっての「差別されない権利」を司法が示していったこと、すべての差別をなくそうとする人にとって追い風となる判決であったことにも重なる。そのことを踏まえたときに、私たちはこれまでの取組の中で、部落差別の解決を国民みんなの課題として、すべての人が自分の問題として捉える取組をどれだけ展開することができて

きたか、戦争の形跡として頓鶴峯地下壕が語りかけることを、どのように受け継ぎ、継承し、発展させていくか奈良の報告が提起してくれたことから学びたい。